

## 博士論文要約

題目：明治期における染織品デザイン教育と日英交流

氏名：畑 久美子

第1章では、研究背景と目的について述べ、先行研究からみえた課題を明らかにし、本論文の構成を述べた。本研究の目的は、明治期に欧米文化を導入しながら近代化を推進する中で、染織品制作者に対するデザイン教育がどのようなものであったのか、特に以下の2つの視点を中心に検討した。1点目は、イギリスと日本では形成過程に差異があるのか、2点目は、日英交流が染織デザイン教育の近代化にどのように関与しているのかである。

第2章では、用語の整理を行い、近代におけるデザインの概念について明らかにした。研究方法は、当時の事典と挿絵入り雑誌を資料に用い、designの語義や概念と用法を検讨することである。18世紀のイギリスにおいてdesignは、デッサンや意匠図（組織図）のことを指し、語義は限定的であったが、19世紀前半には、装飾や模様を考案すること、またはその考案図のことを指すようになった。当時designを行う職種があり、用途に合わせたdesignが行われていたことも分かった。染織品に関しては、生産に手間のかかる紋織物にかわって、機械生産のプリント布が盛んにつくられるようになると、大量生産のためのパターン制作が行われていた。19世紀中頃には、地色と模様の配色のdesignが行われるようになり、様式に沿ったパターンを制作するだけでなく独自性が表れ始めた。

一方、日本では、幕末に英語designが移入、認知され、当初は「雛形、目的、企」の漢語が当てられた。明治初期から訳語が増加し、意匠、図案、などもこの時期に追加された。その後も、万博参加や留学などによりデザインについての知見が増えるにしたがって、designの概念が更新、または再認識され、訳語が順次追加されていった。様々な訳語が選ばれた背景としては、designの概念が曖昧なまま、外交上の英語導入の必要性から言葉が先に移入したためと考察した。明治末・大正期以降は、カタカナ表記の「デザイン」が使われるようになり、明治期までに付与された英語designの訳語がそのまま語義となった。近代を舞台にした研究において「デザイン」という言葉を使う場合には、当時において何を指しているのかを明確にする必要性が示唆された。

第3章では、イギリスの染織品デザイン教育の形成過程を明らかにした。研究方法は、教育機関を対象に一次資料を参照し、設立経緯と教育内容を調査した。近代初期は、様式に基づいた装飾や模様の制作が行われており、デザイン教育は、装飾や模様の絵を手本通り描くための教育を行っていた。産業革命期には生産技術において他国に優越していたため、染織品の装飾デザインはフランスの模倣か輸入に頼っていたが、次第にフランスなど周辺国の生産技術が向上してくると、競合に勝つためにイギリス独自のパターンによる機械生産を奨励することになった。1837年開校の官立デザイン学校では、設立当初は職工に

純粹美術教育を行ったが、その方法では製品の美的品質を向上させるには至らず、美術教育と産業を結びつける試みがなされるも、思うように産業界の協力が得られなかった。第1回ロンドン万博前後からデザイン教育改革が行われ、機械生産、用途、素材特性などを考慮した教育へと移行していった。第2章で述べた、designに独自性が現れ始めた時期とデザイン教育が行われるようになった時期が重なることがわかった。

第4章では、日本の染織品デザイン教育の形成過程を明らかにした。資料には、学校史、設立報告書、校則資料、教科書、博覧会関連文書および記録、新聞や雑誌を用いた。明治初頭から徐々にデザイン教育の萌芽が現れ、明治10年頃からは、工業に美術を取り入れる試みがなされるも、単なる純粹美術の教育に終わり、工業・産業とは結びつかなかった。明治20年頃になると、意匠教育と図案教育が開始され、専門教育が行われるようになった。意匠と図案とは概念を異にしており、機械製造に移行する中で工業を軸とし構造計画中心のデザインは意匠と呼ばれ、西洋向けの用途を考慮する中で美術を軸とした形状や表面装飾中心のデザインは図案と呼ばれた。近代黎明期の日本では、機械生産方式の導入による技術革新、西洋向けの用途や美的要素の付加、輸出や万博への出品、という3つの要素を同時に取り入れながら、デザイン教育が形成されていった。

第5章では、日英交流が染織デザイン教育の近代化にどのように関与しているのか、留学生の日記や万国博覧会の報告書等を資料に検討した。幕末維新期の渡英者はサウス・ケンジントン博物館やデザイン学校などを見学しており、日本において明治前半から博物館やデザイン教育の学校設立に至った一因となったと考察した。日本のデザイン教育導入過程における日英交流で重要な位置にあったのは、ヘンリー・コールを中心としたサウス・ケンジントングループであり、中でも日本との掛け橋となったキーパーソンはクリストファー・ドレッサーであった。ドレッサーの明治9年の来日以前に、イギリスにおいても日本人や日本の文化との交流があったことが分かった。

第6章では、本論文を総括し、結論と今後の展望を述べた。イギリスは世界に先駆けて産業革命を経験し、技術革新が先行して自生的にデザイン教育が形成されていったが、日本では、開国や明治維新などを機に技術革新と並行して、輸出や万博出品に向けたデザイン教育の必要性に迫られていった。近代の日英交流は、日本が開国して近代化を目指している時期とイギリスがデザイン改革を推進していた時期に行われた。日本はイギリスから最新の工学知識・技術、博覧会や博物館、デザイン学校などの産業と芸術を融合させるしくみを享受した。一方、イギリスは、日本の伝統的な工芸の精緻や独特な美を享受し、デザインの一手法として取り入れ、日英双方向の流れがあったことを明らかにした。産業先進国であったイギリスと、西洋に後行した日本の、染織品のデザイン教育形成過程は、開始時期には差があるが、同様の轍を歩んだと考えられた。旧来の教育に新しい要素を取り入れる場合に、単にその要素を移入するだけでは目的を達成することは難しく、適切に融合させる仕組みの構築が必要となる、と結論づけた。